

<翻訳> ロラン・テヴノー（著）「規格による統治」（上）

須田文明（農林水産政策研究所） 片岡浩二（横浜国立大学）[訳]

Laurent Thévenot, (1997) "Un gouvernement par les normes: Pratiques et politiques des formats d'information", in Conein, B., et Thévenot, L. (eds) *Cognition et information en société*, Ed. EHESS, *Raisons Pratiques*, no.8, 1997, pp.205-242.

©Editions de l'EHESS

Fumiaki SUDA, Koji KATAOKA

我々がとらわれている規格化の膨大な運動はどのような政治を生み出すのか。このことでは「政治」について語るができるのではなかろうか。モノを統治する規格が示しているのは、技術や経済よりも、むしろ「政治」なのであろうか。こうした問題が我々の注意を引くのは、それが含む3つの争点のためである。

まず最初に驚かされるのはこの現象のおびただしさである。専門的な技術的、職業的領域をはるかに超えて、規格化の運動は欧州市場構築とともに目立ってきた。子供が興じる遊び場から、（農場周辺に広がり、景観を形成している）生け垣に至るまで、身の回りで欧州規格に服する存在物のリストが延長されるに応じて、規格化運動の拡張がすべての人にとって顕著になっている。その政治的含意は、欧州委員会の権威の新しい源泉の浸透への人々の反応によって少なくとも示されている。したがってこの「市場から規格へ」の性格はどのようなものであろうか(Thévenot, 1995a)<sup>1)</sup>。これらの疑問に答えるために、また規格の政治を解明し、その批判的評価を促すためには、目印としての規格を産出する装置を詳細に検討しなければならない。

こうした検討は第二の争点に直面する。すなわち、重厚に設備され、環境づけられた人間社会で発展している規格性（＝規範性 *normalités*）を扱うために、社会的規格（＝規範）と技術規格、真理の規格との間で認められている区別を再考する必要である。この点でモノへの関係と、モノの客観性への関係に基づく統治様式を理解するためには、古典的区別は全く適切ではない。市場の政治経済学（モノを統合する政治的構築についてほとんど考慮しない）は、規格化の問題に直面しているが、しかしこの経済学は商品の状態、効用の状態でのモノとのやりとりしか対象としない<sup>2)</sup>。規格化の研究は、市場の意味に限られない手法を装備されなければならない、（人間と自然、人工物といった存在物に囲まれた周囲環境へのコミットメントを統御している）「規格性」の多様さへと開かれていなければならない。

適切さ[その場にふさわしいこと、ぴったりしていること *convenances*]に応じて、もしくは（それにかかる）コンヴェンションに応じて、「コミットメントレジーム」を区別する分析枠組みにおいて我々が発展させたのは、こうした多様な規格性を説明するためなのであった。規格化に適用されると、こうした展開はとりわけ第三の争点をはっきりとさせる。すなわち、規格概念との関連を説明するために情報概念を再び精緻化することである。これらの関連を示しているのが、モノと人の「把握 *saisie*」の作業なのであり、我々はこれらのコミットメントレジームの中心にこれをおいたのである。把握することは、結局のところ、活動にコミットすることであるだけでなく、知識によって、また情報的目印によって捉えることである。把握は、（慣行的目印へと行為を導く知覚的指標

の) 多様な「フォーマット」において情報を構成し、別の二つの問題に対して情報概念を位置づけるよう義務づける。すなわちコーディネーションと集合体における情報の共有化と、これをテストする活動への挿入という問題である。集合体への、また実践への情報の二つの関係が、規格においてとりわけ可視的であるのは、その集会的承認のため、行為についてのその処方的力のためである。このように検討されると、規格化の問題は、本書が示している研究の構成の中心にある。その研究は、情報ないし認知の概念を移動させて、心理学からこれらのカテゴリを脱却させ、これらを集合体へとまた実践的コミットメントへと関連づけることを必要とする。おそらく社会科学が、情報及び知識の分析へと主要な貢献をなすことができるのは、また社会科学が、オリジナルな方向で認知についての研究を導くことができるのは(Thévenot 近刊)、こうした問題群への開放によってなのである。

様々なプラグマティックなコミットメントへと多様な情報フォーマットを関係づけるために我々が発展させてきた分析枠組みを提示した後で、本稿の第一部は、規格の規格性が存する様々な場所を検討するべくこの枠組みを使用する。すなわちフォーマルな目印の選択についての批判と正当化を引き起こす公表の場所、さらに現実の世界との規格の関連づけの場所であり、そこで(モノからその特性を抽出するためにモノを問題視する)モノの査察が行使されるのである。第二部は、(分類やコード、測定手法により)定式化された情報の政治に関わり、またこうした現象への別のアプローチ(社会における認知の政治的関与へと関心を向ける)を検討する。第三部では、基本的能力の新たな規格化システムの実施による、財の規格化の、パーソンの規格化への拡張を検討する。すなわち「認知的社会」に準拠することで、このシステムは情報の新しい大きさ(価値)の精緻化に資する。認知的基礎に基づいたこれらの政治的構築の分析に必要な、距離をとった検討は情報フォーマットの複数性への批判的開放を想定している。

## 第1部

### 1. 適切な情報フォーマットから様々なプラグマティックなコミットメントへ

社会科学は、情報の形式的性格についての考察の欠落点を埋めるのに役立つ。それは、知識の様々な根付きについて、また状況から情報を切断するのに必要な作業について注意を向ける。我々が発展させてきたプログラムは、形式的な情報の製造と使用についての調査にその起源を見いだす。情報を作り出す把握は、当初、統計的、情動的流れ(単語にその技術的意味を与える)によって着手され、次に、(一般的コーディネーションを支える)「形態への投資」によってより広範に検討された[訳者より:テヴノー「形態への投資」『総合政策』第20巻、2019]。こうした探求は、すでに構築されたデータの伝達と取得に向けられる通常の見方、また情報欠如、エラー、使用のバイアス、(定式化された情報の事前の作業を想定する)すべての問題についての、通常の見方を移動させるように促す。我々は、モノやパーソン、状況を抽象されることができるような知識形態を構成するために、存在物や出来事を定式化する *enformer* やり方に関心を向ける。社会的客観性の集会的形態の堅固さを当たり前のこととして取るのではなく、あるいは逆に、(交渉やローカルなインデックス性を強調するために)これらを疑問視するのではなく、我々はコーディネーションの様々な可能性へと、情動的定式化の多様性を関連づける。客観化する集合体にでも、知識を有する個人にでもなく、問題含みのコーディネーションへと情報が関連づけられるのである。こうした方向付けは、情報の具体化へと、(そのリアリズムに資するような)物質的支えの場所へと注意を向けるように促

す。こうしたアプローチは、判断に役立つあり得ること *le probable* の形態の複数性を強調する (Thévenot, 1992)。「形態への投資」がコーディネーション様式へと関連づけられるや、我々はその不平等な妥当性を検討するように促される。すなわち情報概念はここで正統性の概念と出会う。共通善の評価にとって使用可能な定式化は、価値（大きさ）の序列に応じた格付けであり、公共的正当化の要請に対応する (Boltanski, Thévenot, 1991)。

社会学的理論が提供してくれる、知識の様々な扱いは、実際、人エージェンシーの多様な観念（集合的アクター、個人的、戦略的、解釈的、ルーティンのアクターなど）に依存し、その環境（社会的物事、行為手段、意味作用的背景、ミリューなど）に依存し、さらにはそれぞれの間での相互作用（集合的行為、個人的意思決定、交渉された相互作用、共通理解、習慣化された実践など）に依存する。それぞれの理論枠組みはある種の情報や知識を特権化し、別のタイプのそれへと対置させる。こうした近道を回避するためにこそ、我々は概念枠組み（特定の配置の方向へとバイアスのかかっていないような）を再構築しなければならない。このために、ある種の配置と、人エージェンシーの主要な役割を強調しすぎる行為のボキャブラリと断絶しなければならない<sup>3)</sup>。コーディネーション様式と調節様式の分析、次いで、プラグマティックなレジームの分析が、これを目的としている<sup>4)</sup>。もっとはっきりと言おう。「コーディネーション」もしくは「調節」というタームは単純に自然で、もしくは物質的な接合を考えさせるべきではない。ヒューマン及びノン・ヒューマンな環境との多様なコミットメントを扱うやり方についての、人間社会での同意を可能とさせるような精緻化からレジームが生じるのである。

（広範囲なコーディネーションを統治している）公的判断への情報の統合がいったん承認されるや、我々は同じ考え方において、行為や実践のカテゴリを再考し、様々な評価形態を喚起させるより狭い環境との、様々なコーディネーション様式として、これを検討したのである。最も一般的で正統な情報形態から、最もローカルでパーソナルな目印に至る情報形態の多様性は、こうして、環境への人のコミットメントレジームの多様性と関連づけられる。コミットメントは（把握と調節ダイナミズムを統治している）適切さの秩序により特徴付けられる (Thévenot, 1990b)。親密性のコミットメントへと向かうために、知識の形式化に適したレジームから離れるに応じて、情報は、その形式的な外在性を解体され、周囲環境との親密化の中で付託される感覚的目印へと根付く<sup>5)</sup>。これらの目印は明示化されず、共有されず、同一のやり方で伝達されることはできない。

コミットメントは人間存在の視点から理解される。人「エージェンシー」がレジームによって異なっているととしても（慣行的に格付けされる存在は、意図の担い手としての個人から、もしくは自らの周囲環境に親密なパーソナリティの担い手としての個人から区別される）、人間存在の視点から理解される。ノーマルさ *normalité* もしくは規格性（＝規範性 *normativité*）が同定できるのは、人間存在の視点からなのである。しかしながらノーマルさや規格性は社会規範の概念によって示されるよりもより広い意味において理解され、現実性の試験において不適切さの把握の形態へと関連づけられる。行為や実践、もしくはルーティンの概念とは異なり、コミットメントは人間エージェンシーによっても、コミットされる環境が把握されるやり方によっても特徴付けられる。こうして「ノーマルな活動」のレジームは単に、（意図を持ったエージェンシーを付与されている）エージェントの個人化のみに依拠するのではなく、機能性によって把握される事物の環境により提供される個人化にも依拠しているのである<sup>6)</sup>。意図を持った、また道具的なエージェンシーは、（その遂行の価値よりもより広い価値としてしばしば示される）評価をコミットさせない。

コーディネーションとコミットメントの様式のこれらの概念から、我々の議論は、集合体におけるパーソンの統治もしくは個人化された活動と、近しいもの、親密なものへの関係とを、同一枠組みにおいて理解するという配慮に答える。我々は、コミットメントレジームのこうした広がりにより切り開かれた空間を考慮しようとする。我々はそこに、権力と批判についての問題の拡張を見るのであって、それは倫理的、政治的な社会学のプログラムに統合される。コミットメントという概念は、世界への関係を統治する基本的規格性＝規範性を浮き彫りにさせる。我々は、規格化の装置の規範性の様々な場所を同定するためにこれを使用し、次いで、(それが引き起こし、またコミットメント様式の間での決定的緊張に由来する) 権力の濫用という感情を解明しよう。

## 2. 規格の規範性の場所

規格はどのような規範性を秘めているのだろうか、規範性はどこにあるのだろうか。唐突にこのように提起されると、問題はそれ自身の回答を含んでいるように思われる。規格はまさに、規範性の道具であるために構築されているのではないだろうか。規格は目標と、適合性検証手続き、罰則を設定しているのではないだろうか。こうした単純な回答は、規格化の装置の最も公式の定義からくるものであるが、問題そのものを解消させはしない。この装置は、我々が同定しようとしている規範性の場所の複数性を含んでいる。このために社会集団を結合させる社会規範という単一のモデルへとそれを縮減することなく、様々な規範性を探究しなければならない。むしろ我々は、モノへの関係における多様な規範性について、また(モノとのこうしたやりとりが起こる) 様々な形の集合体について注目しなければならない。

規格化過程の古典的説明においては、一方での主観的価値ないし利害と、他方での事実的、技術的、情動的側面との間の区別がなされている。規格化を正当化するためにあげられる理由は「技術的」と見なされるであろう。それは生産を単純化するに違いない両立可能性の規格の場合、もしくは交換を促進するための品質規格の場合における、機能性という意味で、である。

この場合、特定の規格だけが「価値」(この場合、社会的価値)と関連づけられることになるだろう。というのもこうした規格は安全性や環境保護を目的としているからである。こうした区別は、前者の規格も後者のそれも共通善の正当化に基づいているということを理解することを妨げる(Thévenot, 1993b)。もし我々が、情報的目印を、(それが保証する)コミットメント様式に関連づけるならば、情報は規範(規格)性の観念の中に最初から統合されている。この観念はもはや価値概念の中に孤立しておらず、「適切なこと」の把握枠組みへと統合されるのである。特定のレジームにおいて、評価的枠組みは価値概念とは顕著に離れており、より狭い目的に関連し、ノーマルな活動や親密な調節の成功のみに関わる。正当化の秩序に照らして行為をコーディネートするのに役立つ集合的コンヴェンションのレジームの一つがいったん種別化されると、規格化の研究は、(規格を支える)コンヴェンションの種類と同定に縮減されないであろうか。実際のところ、装置の構成が示しているように、規格化は正当化可能な集合的コンヴェンションの唯一のレジームへと縮減されない。ここで提示されるであろう、安全性規格についてなされた調査が示すのは、規格化のマシーナリは多様なレジームと情報フォーマットとの結合において機能し、その結合の分析は、プロセスに固有な緊張と、その歴史の変容、その政治的関与とを新たに解明するのである。

### 3. 正当化と規格化

その批判的契機と公的正当化において規格を検討することから始めよう。つまりそれは目印としての規格の妥当性と、この目印が前提するコントロールが疑問視されるときであり、またこの目印が集合的コンヴェンションに準拠しなければならないときである<sup>7)</sup>。慣行的(コンヴェンション的)目印は議論のやりとりの中に挿入されており、共通善を参照する正統な正当化は批判的疑問視を契機にして喚起されるのである<sup>8)</sup>。

#### (1) 規格化と工業的格付け

我々が工業的秩序を研究することで認めたように、モノと手法の規格化はとりわけ、工業的な価値(大きさ)の格付けに適している。測定の抽象化とその輸送に適した形式的基準にしたがって、存在物は量産される。経験的分析が確認したように、この大きさによりなされる試験において、以下のようにきわめて異なった状況において、規格化が必ず喚起される。すなわち原産地呼称農産品の製造(Thévenot, 1989)や銀行での信用付与(Wissler, 1989)、学校教育での指導(Derouet, 1992)、学校の設備(Normand, 1997)、自然環境整備(Lafaye & Thévenot, 1993, Thévenot, 1996a, Norand, 1997)といった状況である。規格化の歴史において、工業的大きさ(価値)の秩序の正当化が最初にある。つまりよりいっそうの効率性を確保するために、設備と手法との間での両立不可能性を回避するために、もしくは製造物の高コストなばらつき(自分自身、その規格的機能性にとらえられている、使用者のニーズに照らして正当化不可能な)を縮小するために規格化しなければならなかったときがそれである。規格化はまずもって製造業者に関わる。彼らは型の標準化による範囲の経済と製品の互換可能性を追求する。規格化に関する近年の経済学文献は、両立可能なこうした標準の普及と導入に集中している(提案されているモデル化がしばしば社会規範のダイナミズムに拡張されているとはいえ)(David, 1994)。

#### (2) 様々な格付け秩序のために、いかなる測定手法が？

上述のいくつかの説明が示しているように、判断において技術規格が使用される。こうした判断は工業的正当化を脱却し、別の秩序の価値=大きさ、つまり家內的(食品や銀行)、公民的(学校)、もしくはグリーンな(自然環境整備プロジェクト)価値へと向かうのである。特定の場合は妥協に対応し、そこでは正当化の複数の秩序の間でのローカルな両立可能性が追求される(公民的=工業的な妥協に広く依拠する義務教育学校施設におけるように)(Derouet, 1992)。しかしながら別の状況では、工業的大きさの試験に特有な道具化が、別様に正当化される主張を支えるために喚起される。そこでは妥協ではなく、主として目指される価値とはなじみのない試験形態への道具的依拠が重要なのである。こうしてエコロジストは、彼らが闘っている当の相手である整備プロジェクトを支える工業的計画者と同様の工業的試験装置を援用することで、自らの案件を説明することができるのである。工業的ならざる大きさに依拠する試験が規格に訴えるとしても、それは別の種類の規格、社会的(家內的秩序における習俗的な)規格であり、法的な規格(公民的秩序における)である。こうした別様の規格は、規格化の現代的布置の中心にある測定道具を可能とさせない。これらのすべての場合で観察することができるのは、多様な格付けが、工業的秩序の試験に道具的に訴えるということである<sup>9)</sup>。

### (3) 市場的品質

市場的秩序に特有なコンヴェンションの中で、貨幣がすぐに頭に浮かぶ。それは（すぐれて規格である）価格による評価の共通の測定である。しかしこうした貨幣的評価の支えを確立するために必要なコンヴェンション、財そのものを忘れるべきでない。財の共通の同定が、市場的關係における公正さの主張の支えをなしており、商品の品質の扱いの長い歴史が市場拡大と同時並行していたのは当然である。モノを商品状態で扱うことが自然であるという経済学者の信頼とはかけ離れて、人間社会はこの倫理的戦略、すなわち Pufendorf の意味での「倫理的品質」を構築し、これに基づいて判断を決定するのである。曖昧すぎないように、またもっぱら社会的コンヴェンションへと向かわないように、「市場の社会的構築」は、市場的コンヴェンションと並んで、（財のアイデンティティを支える）多様なコンヴェンションを含まなければならない。正当化のレジームの集合的コンヴェンションの閾値以下のレベルで、（商品の査察に資する）より限定的でローカル化されたコンヴェンションもしくは適切さの場所が次節で見られるであろう。

ここで我々の関心を引く品質の規格化の運動は、歴史的には、他のレジームによりもたらされる支えの衰退から生じる。品質の問題がかくも重大となるのは、忠実化された市場によってもたらされる信頼が欠如し、工業的秩序の標準化に由来する安定化的均質化（範囲の経済が高コストであることによる製品規格化の正当化）が欠如するときだけである<sup>10)</sup>。国際競争の激化とバラエティの体系的追求が、商品の品質保証への配慮、つまるところアイデンティティを新たな観点から発動させるのである。

### (4) ブランドの商業的標準から市場の規格化的人工補助具へ

競争市場の経済理論におけるほどには、もしくは市場交換のグローバリゼーションについての論評におけるほどには、市場拡張は自動的に実現されないものである。市場拡張は、（市場的格付け装置の単純な展開ではないような）技術的、コンヴェンション的人工物の装備を伴う。こうした装備は、「埋め込まれた」市場についてのポランニー的定式を種別化させ、また（それぞれの市場が秘めている決定的緊張を指摘することで）歴史的に、また文化的に位置づけられた市場の実現の仕方を区別するように促す。

ブランドという装備のおかげで、企業そのものがすでに国際化と事実上の標準化に貢献する。ブランドの記号と承認記号の物質化（ロゴや規格化されたアイコン、登録された商標、ラベル、統制原産地呼称）が十全な発展を見るのは、市場の場によってのみならず、評判の秩序の可視性と普及の圧倒的装置によって支えられるという条件があつてのことではしかない。市場的アリーナの境界をはるかに超えた企業ブランドの展開は、（市場的秩序ではない）世論の承認による格付けを確立する。それ自身の論理へと促進されることで、こうした格付けは競争の試験には必ずしも開かれておらず、（製品の市場的バラエティにとっては有害な）事実上の均質化への傾向を有する。「大衆化」、今日での「マクドナルド化」への告発が対象とするのが、こうした均質化なのである。規格化を分類するさいに、こうした事実上の標準化は、規制に依拠した法律による標準化と対立させられる。

「事実上の」規格という表現が、企業により実施される均質化やコントロールの工業的機械を示しているならば、ミスリーディングである。事実上の規格は市場と世論とに向けられるマーケティングという妥協装置を増大させる。「法律による」規格化については、それは、国家により規制された規格化の、「任意の」規格化への漸進的な変容を伴った、ブランドの契約的管理に近づいている。

この種の契約的規格化が市場のグローバル化と欧州統合において中心的な場所を占めている。商品の査察に関する国家の権威は部分的には、品質規格により統治される契約的装置へと移されている。ここから、自由主義と度量衡的規格化との合成が生じる。この「規格化的自由主義」の定式自体が示すのは、それが内的緊張を秘めていることである。技術的見かけにより不透明化されてはいるものの、こうした運動が広範に広がっている。それは、その経済的評価において技術的事物をどのように検討するかを修正させ、生産者と消費者との古典的姿を再編し、市民の政治的観念、その介入様式、良好な統治形態を再編するのである。

#### (5) 公民的権利のための規格：消費者から市民へ

規格化装置を構成する正当化は、工業的もしくは市場的であるだけでなく、(市民の権利の保護が目的とされているとき) 公民的でもある。エンジニアの合理性によって、また商品の査察によって、規格化は生産者や販売者、買い手の配置だけでなく、消費者もしくは市民(工業的格付けや市場的格付けを逃れる)の配置にも応える。製品安全性規格や環境規格、農業環境規格について、それは見られる。(自由意志による契約的同意という姿から隔絶した) 権力の非対称性を修正するべく精緻化された労働法のように、生産者との市場的契約の不平等性を修正するために、消費者法が発展してきた(Kessous, 1997, chap.2)。市場査察と不正防止から徐々に切断されて、使用リスクへと(1978年の法律)、次いで、「消費者保護」の枠組みにおける安全性及び健康(1983年の法律)へと、保護は拡張された(ibid, chap.1)。こうした公民的方向付けは当初、国家の度量衡を延長させて公的部局により担われており、競争の市場的要請の下で疑問視されるまで規制的規格化が続いた。欧州指令は、以下のような規制手続きによる国家規制のこうした代替を広範に促した。すなわちこうした規制手続きは、いわゆる任意の適合性チェーンに参画し、こうした認証チェーンに沿って情報の定式化を義務づけるのである<sup>11)</sup>。

#### 4. モノの査察：試験される規格

規格化委員会のような公的討議を促す場所で、規格化過程の様々な正当化が見られる。この委員会では規格の条文に記載されるべき目印や手法が決定されるのである。こうして委員会での判断や試験は一般的格付けの要請に服する(Thévenot, 1995c)。しかしながら規格化のマシーナリの広範な部分は規格の適用に向けられる。すなわち適合性を判断するための測定操作が試験にかけられる<sup>12)</sup>。これらの操作は、別の場所及び別のタイプの規格性(もはや正当化のレジームによっては統治されない)へと我々を導く。集合的コンヴェンションとは無関係に、適合性評価は、ノーマルな活動の適切さによっても、プロの試験者もしくは使用者の親密な調節によっても支えられている。我々の調査が示すところでは、規格への適合性の測定は、(科学者がその論文発表において固執するような)レジームには閉じこめることができず、また(存在物の運動を法律へと結合する)物理化学的特性によっても、完全にはこの存在物を把握することはできない(Thévenot, 1993a)。安全性の査察は、モノの複雑な分解である。すなわちそれは、行動において「合理的に予測可能な」使用法と、科学法則には基づかない使用とを統合しなければならない。科学実験室により最終的に提供される特性の一覧表は、(ノーマルな活動フォーマットに取り組む、もしくは商品や使用財の規格化に取り組む)人間エージェンシーすべてを抽象しなければならないとしても、あれこれの意図を持ったあれこれの人間エージェンシーを支えているコミットメントを縮減することは不可能である。

### (1) 個人と事物の配置：特性か効用か？

まずもって市場的コミットメントが、人間主体と事物を配置しており、これらの事物は市場的把握様式によってきわめて差異化されており、物理学的把握が捉えるような共通特性には関連づけられていない。公的討議のための市場的正当化のレジームがノーマルな活動レジームのコンヴァンション的精緻化を提供している。ここでは任意の人間エージェンシーの姿は、事物への特定の関係（一般的評価を支えている）の下で評価される。行為は、私的領有、獲得への意欲として特定され、その執行手段は所有としてしか把握されない。法律がこれらのコンヴァンション的縮減を装備し、（責任帰属への支えとして役立つ）所有関係と、任意の契約者のエージェンシー（行為能力）を装備する。ところが行為のプランと執行との間の効率的関係を一般化させることで評価される工業的価値におけるコンヴァンション的精緻化は、市場的なそれとは全く異なる。こうした工業的価値（大きさ）は、機能性の間での同等性を打ち立てるコンヴァンション的な格付けなのであって、こうした機能性は、一般的に言って、ノーマルな活動とその許容範囲の枠組みの中でしか評価されないのである。評価されるのは、もはや当該の活動ではなくて、効率性の測定なのである。

領有と使用という二つの関係が、全く異なったコンヴァンション的構築（その合成が経済的構築物の中心をなしているとしても）を生み出す。純粋に市場的な品質は交換可能性しか保証せず、使用関係におけるノーマルさの期待をもたらしてはくれない。購入＝販売の時点での可視性へと欠陥問題を制限する格言「買い手による危険負担 *caveat emptor*」の中に、それは見られる。

マルクスが、我々に「使用価値」との区別を認めさせることで、「商品フェティシズム」を示したのに対し、我々の調査は、「社会的関係」をコミットさせる）別の種類の「フェティシズム」、すなわち効用のそれについての検討を進めなければならない。市場的価値への対立において、使用価値がきわめて自然化されたままであるのに対して、「価値」というタームは共通の評価を示さなければならず、この評価を支える集合的コンヴァンションを探求するように促さなければならない。こうした問題を解明できるのは、以下のような事物の安全性の査察を辿ることによってである。すなわちこうした査察は市場的なコンヴァンション的価値に固執せず、その影響力を機能的把握へと拡張し、さらにそれをこえて、様々な特異なる使用へと拡張させさえるのである。この場合、より一般的な効率性の価値のコンヴァンション的構築に照らして、またその閾値以下での（こうした機能的ノーマルさにはそぐわない）親密なコミットメントに照らして、機能のノーマルさが相対的に位置づけられることができる。財の機能的特徴の保証は、今日、規格化の装置の助けを借りて装備されているところである（その私的領有の保証が民法典により長きにわたって装備されてきたように）。したがって規格化の効果の理解は、しばしば告発されている社会的均質化（そこでは個人がその場所を持たないとされる）へと縮減されるべきではない。つまるところ機能的規格化は人間エージェンシーの個人化と相同的なのである<sup>13)</sup>。

### (2) 機能的な、また親密なコミットメントの、事物の特性への縮減

ノーマルな行動のレジームは試行錯誤の不安と暫定性を含んでいる。使用者の未経験により、不注意により、不適切な手段の使用によって、不幸な行動が突然起こる。（販売行為そのものと混同される、即座の、直接的な運動にしたがった）市場交換への行動の縮減は、その所有者への事物特性の単なる移転へと経験時間を縮減する。こうして購入により獲得される事物の純粋に市場的な品質



によって機能や使用を保証することは困難を提起する。ところが安全性にかかる規格化装置の進化は、市場との親近性によってこうした方向に進んでいる。すなわちあらゆる保証が製品の格付けにしなければならず、人間的エージェントは、こうした品質（それについて彼らが契約的に結合されている）についてしかお互いにコミットしないのである。

こうして安全性の要請に向けられた規格化は内的緊張を含み、我々は、批判的分析を導くためにこれを解明しなければならない。安全性の規格化は市場的取引とは異なったコミットメントにおいて事物を捉え、買い手と売り手とは異なったエージェント性を検討することを前提する。労働の研究が、契約的交換を超えて、意識的な掌握だけでなく、親密な能力を考慮することを要求するのと同様に、使用の考慮は購買とは異なったあらゆる経験において使用者を捉えることを義務づける。安全性の要請が要求しているのは事物を使用の試験に付すことであり、事故が起こるかもしれないことは、不正規な使用を想定して、ノーマルな機能を超えるように促すのである。しかしながら自分用に調節される、親密な、ないしは探索的な使用のこうした考慮は、結局のところ、市場の把握に都合のよい製品格付けに行き着く。こうしてテストのマシーナリは、機能的もしくは親密なコミットメントを事物の特性（物理化学的特性の拡張としてみなされる）へと変容させる。

規格化の技師にとって、変換の主要な手段は、度量衡学の同僚から刺激された標準原器照合検査の作業を延長させ、人間存在の標準原器を構築することにある。もちろん、標準原器との照合検査は、あるコミットメントレジームを別のそれへと完全に縮減することはできない。つまり意識を持った行動のレジームに属する人間的エージェント性を、特性によって把握することはできない。せいぜいのところ、行動の代用物が、テストに統合された行動規則性によって捉えられる程度であろう。赤ん坊のおんぶひものテストでは、その基本は行動代替物である上下の規則的運動（赤ん坊を運ぶ人間存在の歩行により引き起こされる不意の振動の代わりとなる）に服する。

標準原器がそれ自身、基本的な物理化学的特性（科学的度量衡の対象となる）へと関連づけられているほど、縮減はよりいっそう完璧なものとなる。こうしてモノを飲み込むことに熱中している赤ん坊は、以下のような口＝標準原器によって特性を捉えられる。すなわち中空のシリンダーの単純な形状で、その底は斜めに 45 度傾斜し、規格化委員会のメンバーたちが合意した寸法であるような（1993 年 12 月 22 日の文書 CENT/TC 252/WG 3, N104）、そのような形状を有する模型へと縮減されるのである。こうした基本的な物理的特性への縮減によって、（世界の把握の様々なレジームに開かれた）人間行為を包摂することに成功したように見える。すなわち現在のテストの実施により要求されている活動、もしくはテストの器具（「恣意的」とされる）の中に軌跡を刻印した過去の活動を含んでいる。基本的特性へと縮減されても、標準原器はまだなお、以前の間行動の痕跡を担い得る。人間の手の標準原器（手提げ籠をつかみ、また「縦振動の安定性」のテストへと統合される）は直径 10mm/80mm のチューブへと具体化される（規格 N104）。ある技師はこうした選択を批判する。このテストを最初に開発した実験室（そこで規格が合意された）において、「たまたま彼らの手元にあったチューブ」にしかよらないような選択なのであった。別のケースでは、「たまたま自分の手元にあった鋼材（後にこれが規格となるのだが、しかしもはやこれほどここにも見つけ出せない）」（実験室の技師）をつかんだ人間エージェントが批判されるのである。

正当化を妨げるこれらの人間行動や把握機会を回避するために、この実験室の技師は以下のように考えている。「理想は、規格化に応じた機械を構想し、この機械に全部を作らせることであろう。これはテキスタイル部門で行われている。所与の時点で、機械が共通に定義され、我々は 10 ない

し 12 の機械を持っている製造業者に接触し、この機械が異なった実験室に配分された」。しかし我々はしばしばこのような場合とかけ離れている。すなわち特性を引き出すべき機械類は実験室によって異なっており、それ以前の活動を引きずっている。「ベビー用品領域では、全く異なっている。それぞれの企業がかなりの機械を持っており、それぞれがブロックされないことを望んでいるため、記述はそれほど詳細ではない」（実験室の技師）。テストされるべき機械の部品へと人間エージェントが変容され得ないこともあり得よう。それは同一の実験室によりテストされる製品の多様性のためでもあるし、それにかかる投資費用のためでもある。こうして折り曲げ行動能力が機械の特性へと変容されるために、ベビーカーは、その折り曲げ方法によって全く異なりすぎている（製造業者の私的な実験室を除いては）。そのうえ、規格のためのきっかり 1000 回の折り曲げが、人間行動フォーマットにおいて「手で」なされる。

### （3）特性の輸送における人間的エージェント

奇妙なことだが、規格は規則についての難問を回避すると主張し、規則自身の適用についての規則を含んでいる。ヴィトゲンシュタインやクリプキ、グッドマンを読んだことがなくても、モンテニューによりすでに指摘された法律道具の無限回帰を想起せずとも、現場の規格作成者は、規則についての規則は「糸車」を止めることはないだろうという経験を熟知している。国の試験機関や民間企業で規格の設定を担う技師たちはたえず、「解釈」を「精緻化し」、「確保し」、「維持する」ことについて語る。すなわち「規格があり、規定条文があり、法律があったとしても、解釈もあるんです」（企業のセキュリティ技師）。解釈というこのボキャブラリは、規則の実施に向かいながらも、（ポストモダン運動が集中的に探索した）解釈的渦潮を前にしたある種の魅惑について思考を停止するリスクがある。コンヴェンションが依拠しているコミットメントの種類を精緻化するためには、解釈というボキャブラリでは不十分である。自らをかけて、あるいはこう言ってよければ、その製品をかけてでも、特性を維持しなければならない、規格化管理を担う企業の技術者は、かくして、緊密な活動と調節によって規格の「共通の解釈」を維持しようとする。フランスのある製品について英国の実験室でなされるテストに準備するために、この技術者はこの製品と共に移動し、新しい事物への規格適用の共通解釈の精緻化に留意する。それぞれの主要なイノベーションの後で、幾度に渡る「交渉」が起こるが、それ以前の「解釈」の機会に提示された目印に基づいて、交渉はなされるのである。英国の試験機関の人員の膨大な流動化をもたらした行政再編の事例では、親密なコミットメントでの解釈付与は廃止され、場所や人、またモノについて、調節の目印が新たに設定されなければならなかった。

「私はある新任者と接触した。規格について重要なのは、この人のアプローチの仕方だ。つまりこの人物があなたの問題にどう答えるか、彼がどのように解釈するか、彼がどのくらいの知識レベルなのかだ。この新任者にとっては未開拓の領域なのだ。私はこの人物と接触し、特定の解釈を突き合わせた。私が望むのは、私がすでに持っていることを、私のすべての注釈などを彼に移し替えることができることである。安定性の試験のレベルではベビーカーにおけるマネキン人形の位置については、これをどう取り付けるかについて、規格は何も指定していない。極端な場合、ベビーカーをひっくり返すこともある。このことは新任者に移転する問題を提起した。新しいベビーカーについて、私はすでに解釈について交渉していた。この新任者に受け入れられることは、自明ではなかった。私はすべてにわたって先輩なわけではなかったから」（企業の安全部の技術士）。

## 第二部

### 5. 規格化された情報の政治

規格化の装置が内包している様々なタイプの規格性を同定した後では、我々は規格への適合の政治的含意をいっそうまく扱うことができる。我々の分析枠組みはこうした検討に適している。というのも、それはコミットメントの根本的形態を扱っており、政治的、倫理的な構築は、特定の拡張の要請に応えるコミットメントを合成しているからである。我々はここで、規格化のすべての政治的側面を考えようというのではない。我々は、様々な情報フォーマットの構成様式と、その中で特定のフォーマットへの縮減（「政治的になること」がもたらす）の帰結について注意を集中することにしよう。この場合、規格化についての考察は、形式化された情報の政治についてのより広範な考察（統計的政治についての我々の以前のプログラムを延長させる）へと開かれている（Desrosières, 1993; Thévenot, 1990a, 1994a）。形式化された情報が、職業的、技術的、経済的世界からはみ出し、我々の日常生活のあらゆる場所に介入するとき、こうした情報は、別の様式の情報及び知識（同一の公的統治の要請に服さない世界への関係にかかわる）との間で緊張を引き起こす。したがって規格化についての批判的分析は、標準化がもたらす均質化に留まるわけにはいかないだろう。こうした分析は、定式化の作業の、別の形態の情報フォーマットへの影響、この作業が支えるプラグマティックなコミットメントに関心を向けなければならないであろう。この第二部は、話題を規格化された情報へと拡張すると同時に、情報の規格化の現象への別の社会学的アプローチとの対置へと開かれている。こうしたアプローチが我々の関心を引くのは、それが、その政治的含意に注意を向けるからである。

### 6. 問題となる代表者：代理人、マイノリティ、コンヴェンションへの多様なコミットメント

ここで研究されているテーマの政治化の重要な様式は、代表者と表象＝代表の問題に関わる。ブリュノ・ラトゥールとミシェル・カロンは、この概念を彼らのオリジナルな社会学的構築の中心においた。彼らの世界には、代表者や代理人 *délégués*、代理者 *lieutenants* が住んでいる。これらの登場人物たちと、（論争の時に彼らが巻き込まれている）筋書きにもかかわらず、この社会学は、代表者たちとの議論や批判、あるいは交渉の条件に関心を向けない。政治的関係についての異なった観点から、この社会学は実際に、アレンジメントがどのように作られ解体されるかについて専心する。ホップズが、許可する人、権威を示す人について論じた政治的、意味論的考察を延長させて、主たる問題は代表者の力に関わる。ピエール・ブルデューの社会学のような、権力についての別の社会学においてみられるような、代表者の主張の暴露は、この場合、利害付けのチェーン（発言を行うその末端は、集団の代理者がそうであるように、切り離せない）を明らかにすることにある。ネットワークの連結は、ノン・ヒューマンなアクタン（ネットワークに参画し、代理人の役割をつとめさせる）に与えられる役割のために、人間代理人をはみ出す（Callon & Law, 1989）。

度量衡学が、ネットワークにおけるこれらの布置（科学的測定単位の代表がその中に、多様に枝分かれしている）を完全に説明している。だからこそラトゥールは早くから度量衡に関心を向けていたのであり、世界への科学の拡張に貢献する、人間存在と道具のチェーンを白日の下で開陳することに専心したのである（Latour, 1995 chap.6, C.）。このケースは、アクターネットワーク理論の社会学により研究される別の領域とは異なっていることを強調しておこう。そこでは（代表を送り込

む) ネットワークや、その論争もしくは翻訳の結節点は、社会学者の作業によって明らかにされる(この作業が、アクターを追跡することでなされるとしても)。度量衡では、ネットワークはアクター自身により承認され使用される。環ごとに、事物のアイデンティティを再構築することを可能とさせる「トレーサビリティ」から生じることで、度量衡は、その環のそれぞれを試験にかけるという見世物を定期的に提供してくれるのである。アクターにとっての基準となるネットワークと、自らの調査を通じて、研究者によって明らかにされるネットワークとの間のこうした違いが顕著になるのは、アクターたちが自らのコミットメントをどのように扱うか、またそれをどのように評価するかに注意が払われる場合である。すなわち基準となる価値を、評判や度量衡、もしくはトレーサビリティにおいて伝え、確立するネットワークの利点を評価するのか、それとも通常の権限をはみ出し、従属(断ち切ることが望ましい)を引き起こす権力の害を評価するのか、である<sup>14)</sup>。

### (1) 委任の社会学の批判とマイノリティの政治

スポークス・パーソンについてのこの社会学は、激しい論争によってぐらついている土台の素描と、他方で、こうした契機の外側にあつて、口をつぐむことへの容赦ない告発の覚めた確認との間で動揺する。この第二の立場に対して、また(特権化された声の大きい担い手にしか発言をさせない)背景にある政治に対して、批判がなされる。Erhard Friedberg は以下のように書いている。「したがってカロンとラトゥールのアプローチは、すべての他のアクターたちを犠牲にして、イノベーターの思考や翻訳者をもつぱら追跡することにある。それが要求するのは、(アクターたちを結合している)システムを再構成するために、当該のアクターたちすべてへと順次、場所を与えるのではなく、翻訳者だけに場所が与えられることである」(Friedberg, 1993, p.207)。Suzan Leigh Star は、ここで我々の関心を占めるテーマについて彼女が行った研究において、同一の問題に取り組む。すなわち国際分類に統合される情報規格(Bowker & Star, 以下を参照)と、コンヴェンションである(Star, 1991)。彼女が要求するのは、代表者の下に整列されたアクターへと、またコンヴェンションから外された人々へと発言権が与えられることである。この論争において、我々は社会学モデルと、社会的、政治的モデルとの間の移転に注目することにしよう。

個人間の差異を均質化させる集合的委任に対して、またこうした差異を軽視する標準に対して躊躇する点で、彼女の批判は政治的自由主義へと合流する。それでも委任や翻訳に対する不信感を動機として、彼女の議論は自由主義とは区別される。法律によって発行される規格ではなく、事実上の規格であるような、市場の標準が非難されることになる。すなわち企業の私的な戦略を通じて、製品は多国籍企業の立地により、また模倣(この標準が世界で流通することを保証する)により普及するのである。しかし Star は政治的自由主義と経済的自由主義とを単純に結合をさせるのではない。こうした結合は、通常、経済的自由主義のレッセフェールを、(政治的自由主義において称賛される)個人的自由の保護者として提示しているのである。彼女は玉ネギ・アレルギーのために自分には向いていない標準的ハンバーガーを告発する。個人間の差異は、生まれながらのハンディキャップではなくアクセスへの不平等としてみられ、標準への基礎となる多数派に対するマイノリティの格差として不平等がテーマ化されるのである。玉ネギ・アレルギーの人々からなる特別な利害集団の購買力 special needs がなければ、玉ネギなしの新しい標準に至る「市場のニッチ」は創出されないのである。この説明が示すように、市場の試験は、(ここで、部分的には公民的である——健康リスクを予防し、ハンディキャップを補償しなければならないという意味で——)製品の格付け

を統御するには十分ではない。健康もしくは安全性の規格に共通した公民的構成要素を検討するよりもむしろ、Star は、マイノリティ保護の政治の中にこの問題を統合する。こうした政治は、多数派と少数派との間での不平等の告発において、公民的要素を含むが、公的なるモノの多文化的な構成を評価する自由主義的インスピレーションの政治的な姿も取っている。

Star が言及する「アイデンティティの政治」は、マイノリティ的帰属についての新しいコンヴェンションに支えられた多文化的称揚に限定されない。多なること **multiple** は個人の自由主義的複数性において、もしくはアイデンティティ集団の多文化主義において、社会のレベルで布置化されるだけでなく、(肯定的にとらえられた)「多なるパーソナリティ」というテーマによって、パーソンのレベルで布置化されるのである。ある公的、もしくは社会的空間がアイデンティティの自由主義的対立から構成されるのではなく、パーソナリティそのものが、異なった世界に接続した多なるパーソナリティの間での交渉の帰結として提示されるのである。ある姿から別の姿への移行が、彼女により使用されている社会学的モデルによって促進される。すなわち複数の社会的世界への同時的なその帰属のために交渉される「バウンダリー・オブジェクト」がそれである(Star & Griesemer, 1989)。表象やアクタンの徴用に対立するのが、異なった世界への多なる帰属であり、これがパーソナルなアイデンティティの交渉を生み出すのである。

## (2) パーソンへのコンヴェンションの影響

したがって Star のアプローチは規格やコンヴェンションについての批判的分析をもたらす。以下のことを確認することで、彼女は John Law (1994)の批判と合流する。すなわちコンヴェンションによって確保されるコーディネーションは相対的なものであり、(こうしたコンヴェンションを主張しない)人々や状況の排除や無秩序という対価を払ってしか、コーディネーションはなされないのである。つまりもし「マクドナルド」標準が日常的な特定の機会に、圧倒的な顧客の世界を整序しているとしても、多くの人々はその困惑とカオスを堪え忍んでいる(Star, 1991, p.42)<sup>15)</sup>。したがって Star が提案するのは、「コンヴェンション的なこと *le conventionnel* の普及」を探求するために、また(この普及と標準化の維持を担う)パーソンを明らかにするために、「コンヴェンションおよび標準的形態との出会いについての現象学」に関心が向けられることなのである。こうした方針はネットワーク内部における「パーソナルなこと」の性格の考慮を前提し、フェミニズム研究におけるその場所と対比しての、アクターネットワーク理論におけるその欠如が批判されている。フェミニズム研究は経済において長い間不可視とされてきた家事労働を明らかにしたのである。Star によって描かれたアイデンティティの政治学は、パーソンを複数の結合の結節点とし、異なった社会的世界への多様な帰属の合成とするのである。しかしながら、(Howard Becker (1988)によって、そもそもコンヴェンションの観点から理解されている)社会的世界という概念に依拠することで、コンヴェンションの現象学とパーソンを上手に扱うことができるであろうか。

Star の指摘は、コーディネーションのコンヴェンションの裏面を明らかにすることで、スポークス・パーソンのモデルを超えてしまうような射程範囲を有する。それは、「形態への投資」とコーディネーションとの間の関係への批判と重なる(Friedberg, 1993; Pradeise, 1988)。こうした問題を深めるために、我々は Luc Boltanski と共に、まさに、(同等化と一般性への上昇の作業が引き起こす)決定的緊張を対象としたのである。特殊な、もしくは偶有的なことに対して、一般化が正統であるという妥当性を主張することは、単に認知的な作業であるだけでなく、共通善を参照した判断

をもたらすのである。(一般的な射程範囲を持つ情報を構成する) カテゴリや分類、規格の確立は、完全な縮減に対する批判的反応と抵抗を引き起こす。我々はこうした批判的ダイナミズムが正当化の秩序の内部で起こり(例えば、市場での有力な需要と、ニッチ市場を持たない需要との間で)、もしくは異なった秩序の間で(例えば、市場により正当化される標準化と、市民の安全性により正当化される規格化との間で)起こるのを見る。広範なプラグマティックなレジームを扱う後論で、我々は、公的討論のレジームとパーソナルなコミットメントのレジームとの間での、決定的な緊張の別の源泉を分析しよう<sup>16)</sup>。コミットメントレジームの間でのこうした決定的緊張の分析によって、(集合的コンヴァンションへの縮減がもたらす) 権力濫用の感覚を理解することができる。

### (3) 合成的ネットワークと多なるコミットメント

Star の分析は、分権化された政治(分散的知識を強調する様々な社会学と相同的な)の中に場所を見いだす。こうしてアクターネットワーク理論のアプローチ(Latour, 1995)と、(プログラムとプランのモデルに対立させられる)「分散的」インテリジェンスについての研究(Gasser, 1991)、情報的人工物についての研究(Norman, 1993)、分散された知識のモデル(Huchins, 1994)、分散された社会的認知についての以前の研究(Cicourel, 1974, 1990)、これらの間での収斂が米国で見られるのである。ヒエラルキーやプラン、個人的能力に対して、ローカルな結合や装備への関係、協力、萌芽的ダイナミズムが強調されるのである。

ネットワークや普及の姿は、図示が行う平板化によって、(媒介物の流通を保証する) 結合の均質性を喚起させるリスクがあり、そのコネクタにより、我々が関心を向ける決定的緊張を消失させるリスクがある。セグメントによって異なるヘテロさが認められると、ばらばらなセグメントの合成の条件を理解するためには結節点の分析が決定的に重要となる。「翻訳者」ないし「媒介者」という概念は、(ばらばらな結合にもかかわらず、何らかの能力が通過するために必要な) 合成作業の制約と可能性を指摘する(解明するというよりも)。こうして労働者のコンピテンスについての判断への信頼を移転させる(Eymard-Duvernay & Marchal, 1997)、パーソナルな接触の通過性 *transitivité* は、おそらく、パーソナルな結合に関与するレジームとは異なったレジームを必要とする。すなわちこれらのネットワークを確固たるものとしている装置により支援された、第三者による判断の構築、(身近な人への信頼を一般化させる評判の形態に応じた) 信頼できるパーソン、もしくは抵当としてのモノの格付けである。その多様性において検討されなければならないのは、たんに、パーソンの間での結合だけでなく、モノへの関係なのである。モノへの構想の委任という考えは、人間的コーディネーションにおけるモノの場所をどのように明らかにするか、という点できわめて実り多い。ところがこうした委任という考え方は、使用に際してのモノの調節を無視することで、機能的フォーマットにおいてしかモノを捉えないというリスクをもたらす。モノとのやりとりの豊富な様式について調査を開放することで(Thévenot, 1994b)、(ノーマルな活動のレジームに照らして、道具的な規格性に対する迂回ないし逸脱としてしか現れない) 使用に対しては、機能的コミットメントおよび規律的扱いの場所を割り当てる。

## 7. モノの把握：測定の政治

把握される事物が日常的使用物であるとき、その規格化は、異なった把握様式の間でのとりわけ激しい緊張を引き起こす。この点で、度量衡学的規格化に関与する事物は異なっているのであろう

か（こうした事物は科学的特性へとあられもなく縮減され、かくして別のあらゆる人間的把握を捨象されると言われている）。ところが、度量衡学も同様の問題に突き当たる。こうした問題は、（関与されるコミットメントレジームの多様性が顕著な）日常的事物の規格化作業において、いっそう際立つのである。Mallard は、度量衡学的アプローチにおける、「コンヴェンション的に真実な価値」についての公的概念を明らかにする(Mallard, 1996, p.384)。度量衡学者自身が、真理の価値を有するモノについてのコンヴェンション的な合意について明らかにしている。それも、普遍的法則を産出する実験室の秘密への人間的介入の役割を探し出すのに適した科学社会学者などを必要とせずになのである。公的な集合的コンヴェンションはノーマルな活動のレジームに基づいて確立される。すなわち、規格化の条文が指摘するように、コンヴェンションは、ある組織における「所与の目的にとって有意でない差異」の許容度を規定している。ここには、ノーマルな活動（効用を与える事物の機能的把握を支える）の目的論への明示的な準拠が見られる。

### （1）特性の度量衡学的把握とのパラレル

試験技師のために、測定を規格化し、「本質的な物理的特性」を維持するために、度量衡学者自身は、物理的特性から、状況や物質的事物（その扱いが全く異なったコミットメントレジームに属するような）を捨象するように促される。これらのハイブリッドな事物は、その機能性を通じて、ノーマルな行動にコミットしていると同時に、度量衡として、基本的な物理的特性の担い手である。電圧を測定する技師たちは、同僚たちと同様、自ら移動し、自らの同僚たちとの緊密な結合を維持しなければならない、振る舞い方、使用における装備と徐々に親密性を確立するやり方について同意する。しかしながら関与される知識フォーマットおよびコミットメントの複数性は、報告書からは消失する。Joseph O'Connell は他の科学社会学者たち(Latour, Collins, Schaffer)に同意し、科学の普遍性を実践において維持する技師たちの見えざる労働を、度量衡学の中で暴露するが、科学的説明は一切なされない。こうした暴露は、学者たちの社会集団の権力の濫用と、これを維持する分業を告発するための正当な理由を提供することで、代表者たちを疑問視することに貢献する。我々が提示する検討は川上での調査を追及し、コミットメントレジームの複数性の縮減（これらのレジームのうちの一つによる支配をもたらすことになる）を明らかにする。

物理化学的特性による扱いと両立しがたいレジームから脱却するための繰り返される努力が、度量衡学の全史を際立たせている。19世紀の電気抵抗の標準原器を議論するさいに、英国人たちはドイツ企業ジーメンス社により提案された単位に反対しているが、その理由は、それが物質（水銀）と、恣意的と判断される構築（断面1ミリで、高さ1メートルの円柱で、摂氏0度）に依拠しているから、というのである。理想は、「立法者や科学者ではなく、自然の印籠を刻印した」「第一次的単位」（総量、長さ、時間）に言及することである（1873年の報告書、O'Connell, 1993より引用）。1960年代のより最近のエピソードが、あらためて我々に示すのは、ノーマルな行動のフォーマットに属するエージェントとコミットメントの物理的単位を引き出すという配慮である。すなわち過剰な傾斜を回避することに努力する慣れたエージェントにより手で移動される、取っ手のついたボルト標準原器である（同上）。「内在的標準」は結合と輸送の人間活動から脱却するために構想されている。標準部局のエージェントたちが、第二次的標準原器と第一次的標準原器との間の連結チェーンを実践的に再構成するような、こうした定期的なセレモニーが多くある。内在的標準は、自分の家で組み立てられる、物理的試験キットのようなものである。すなわち最も権威ある代表者

への結合はもはや、試験プロトコルを設定する指示書と、様式と手続きの格付けのチェーンにしかよらないのである。

度量衡学のこうした歴史的進化の最近の段階は、契約的、手続き的側面を強調することで、規格化の現在の変容に似ている。下請けの膨大なネットワークの頂点にあるアメリカ国防総省の刺激の下で、1980年代末以降、標準化のチェーンと測定手法の手続き化が実施されている。予算制約の背景において、測定手法の正確さを検証するための下請けの試験機関を訪問するエージェントたちの作業に代えて、トレーサビリティのチェーンが代替する。アクターその人の移動を関与させる——したがって、複数の試験レジームに裁量の余地を与える——試験は、(辿るべき手続きと、作成されるべき報告書を規定する) 集合的コンヴァンションの道具によって代替される。こうした変更は、度量衡学者の間でも論争を起こしている。彼らのうちの何人かは(自然の法則よりも法律の規則を優先させるために) 自然法則を無視するトレーサビリティを告発するのである。彼らは、この新しい「権力」を逆転させたいとする。「触知可能ではあるが、特殊である事物が、(この事物を代表することを目的とした) 触知不可能だが効率的な実体から注意を背ける」(同上)。O'Connell はカトリック及び宗教改革における聖書への関係とのパラレルを描く<sup>17)</sup>。度量衡学と神学とは、超越 *transcendence* の触知可能な代表を現実とし、維持し、普及することを共通としており、それは、(永続的現前がないために) こうした超越によって媒介者たちを作り上げることで、権威と普及の社会システムを作り上げる。度量衡改革は「カルヴァン主義者」であろう。というのも、それは、「ボルト」への、各人の直接的アクセスを開くからである(「カトリック的」媒介と比較される「定期的贖罪」なしに)。神学とのパラレル<sup>18)</sup>は、媒介者により別様に支えられる表象と代表の様々な関係のより包括的な検討を促すことで、代表者を疑問視することとは異なる。度量衡学的装置の最近の歴史的変容とそれが引き起こす論争とは、興味深い方向へと我々を誘う。以前の度量衡学的統治は、標準原器へと、またそれを超えて物理学的法則の変数へと、特殊な使用のシーンを結合させる、膨大な一連の存在物を確立した。その結合は検査された道具のみならずパーソナルで親密な一連のコミットメントを仲介にして確保されていた。ところが第二のシステムは、自律したエージェント(人間存在というよりもむしろ制度)をしか認めない。これは契約に準拠していることを示す形式的目印に自らコミットするのである。改革は、「ボルト」やその代理物——定期的に結合されるべき標準原器もしくは自分の所で作り直されるべき実験——の一つが把握される) 状態を変容させるだけではない。この改革は、装置が装備するコミットメントタイプにとって妥当なエージェント形態を変化させるのである。

### 第3部

#### 8. 人間活動の情動的把握：機能における「把捉」

「把握 *saisie*」の作業についての我々の分析は統計的コード化、とりわけ職業活動のコード化についての最初の考察の一部をなしていた。それは今日 Philip Agre の研究と重なる。彼の研究はコンピュータ化されたデータの収集作業と、それに付随する人間活動の定式化に関わる(その研究については以下を参照)。認知的同等化を政治的構築と接近させるという我々の配慮に応えるのが、分権化された「把捉 *capture*」の新しい形態の政治的含意に対する Agre の着目である。たとえ我々と彼のアプローチが似ているとしても、収集様式と(この様式が伝えるべき)組織タイプとは異なっている。我々が研究したデータは統計的全体化に統合されている。それは、国家の活動を導くため



に総務省統計局（国立統計経済研究所 INSEE）により産出されるデータのようなもの、もしくは標準化された分類によって産出されるデータ（本書所収の Bowker & Star の論考を参照）のようなものである。Agre はといえば、民間組織の中での個人的活動についてのローカルな情報の分権化された収集に関心を向ける。こうした情報は、リアルタイムで、もしくはわずかの時間的遅れでマネジメントのために使用されるのである。こうして彼の検討は事物の規格化された把握と、作業中の人間存在の把握との間を移動しているが、これについては最後の部分で取り上げることにしよう。

メチエの分類が職業的地位を把握する *saisissent* のに対して、分権化された「把握 capture」様式は、より基本的な活動単位、課業の単位を対象としている。人工知能分野での自らの経験の強みによって Agre は、使用される情報システムに含まれている行為表象を説明する。こうした「行為文法」は複製可能な基本的単位に基づいている。すなわち会計システムにより承認される行為タイプや、テレマーケティングのスクリプト、高速道路網の出入口の標準的運動、パソコンとのインターフェースの機能、ネットワークとのコミュニケーションプロトコル、「マイクロ・マネジメント」のためのサービス大企業（マクドナルド、フェデラル・エクスプレス、ピザ・ハットなど）の活動を分解する課業である。把握と規格性との間の関係もまた Agre にとって重要であり、彼は、把握は、「発見」というよりもむしろ事実上の規格化である、と指摘している。把握されたエージェントは、情報収集によって邪魔されないために、もしくは情報収集から生じる自らの行為の表象を管理するために自らの行動を変更する。さらに把握される行動への構想者の親密なコミットメントがないために、「行為文法」は行動の処方箋的決定と同一視される傾向にある。また把握形態の選択が、統計分類のそのような問題となりえる(Desrosières & Thévenot, 1988)。

行為のシークエンスを厳格に定めるテイラー主義(Dodier, 1995)とは逆に、「把握」装置が（大衆サービスを例外として）しばしば、ある程度の個人的自由を開かれたままにしておくのは、コントロールの負担を「市場によるディシプリン」へと関連づけることによってである。したがって人間行動のこうした新しい度量衡は、テイラーによって精緻化された度量衡とも、これに付随した一連の「形態への投資」(Thévenot, 1986)の度量衡とも異なる。エンジニアであるテイラーの度量衡が、行為フォーマットと、習慣によるたたき込みのダイナミズムとに対応していたのに対して、フレキシビリティのマネジメントは今日、市場の自由主義の高揚において、(意識的行動レジームに属する)人間エージェントによる特定のイニシアチブを承認し、責任（このコミットメントレジームと整合的な）を付与することに関心を持っている。我々が指摘したように、このレジームにおいては、事物の機能的把握は、意図を持った人間的エージェントと対をなしている。Agre のモデルに対して、こうした事物の把握を考慮しなかったこと、また人間行動の把握についてのその帰結を考慮しなかったことについて批判することもできよう。彼は、人間存在の追跡 *tracking* とモノの追跡とを区別することはないとし、二つの把握は結合しており、事物は人間行動の把握者として役立つとした。しかし彼は、とりわけて「情動的」でもない技術的事物の機能的道具化が、こうした情動的把握を可能とさせるための前提条件をどのように構成しているかを等閑視する。事物のノーマルな機能性が、把握者を人間的エージェントの活動にまで遡らせるために必要なのである。

こうして民間の、分権化された、新しい種類の企業統計を、国家の統計と対立させることができる。国家の統計は、公共部局によって作成され、主として集合体に関わり、自然法則モデルに倣って行為の法則を発見し、社会的経済的政策の測定のために専門的知見を供給することを目的としている(Affichard, 1987)。しかしながら国家の統計にとってと同様に、たとえ分権化された把握を通

じてなされるコード化が、事物（把握者として把握と数値化の人間のエージェントに代替する）の機能性の中に埋め込まれたままであるとしても、情報として妥当なものを構成するためには事前のコードが必要である。こうした歴史的変容の中で、情報収集システムは、付随する品質規格化運動によって支えられている。その機能性について規格化された事物の品質に対応しているのが人間的存在の品質である。すなわち基礎的課業（その執行はこうした「把握」様式によって継続的に管理されている）を実施するさいの基本的コンピテンスである。

## 9. 財の規格化からパーソンの規格化へ：情報的シテの形成

### (1) 人間活動の情報論的アプローチ

財の規格化運動の政治的含意は、この運動が人間存在の品質（「基本的職業的コンピテンス」の観点から測定される）へと拡張されるとき、いっそう顕著である。こうしてここ 10 年ほど前から「全国職業格付け National Vocational Qualification」<sup>19)</sup>にしたがったコンピテンス把握の新しい形態が、雇用管理と職業訓練管理に資するために、英国で精緻化されてきた。コモンウェルス他の国々（オーストラリアや南アフリカなど）やメキシコ、旧東欧ブロックにおける類似したシステムから刺激されて、こうした運動は近年、国レベルで導入されるべき欧州勧告を通じて、フランスにおいて特定の反響を見いだしている<sup>20)</sup>。コンピテンスの規格化システムの論理が、またとりわけ分類や職業格付けのより古い形態との相違がよく理解されるのは、製品規格化（そのモデルとして役立った）による迂回を通してである。その品質認証によって、財やサービスを管理するために発展されたあらゆるマシーナリを労働能力へと移転することが、サービスの中間的格付け（人間存在の活動からは完全には切断されないであろう）によって促進される(De Bandt & Gadrey, 1994)。

自由主義的なインスピレーションを受けた、コンピテンスについてのこうした新しい標準は、労働市場を、可能な限り製品市場に同調させること、「厳格性」（メチエや学習、学歴資格への結合による）に対抗することを目的とする。コンピテンスの観点から確立される、品質の新たな形態は、パーソンの評価において、またその試験において、職種団体や企業のような確立した形態の集合体には持続的に結合されていない。「家内的」もしくは「公民的」な価値を有する集合体が、エージェントに対して、共同体の様々な構成に応じた帰属を付与するのに対して、その疑問視は、（純粋に「市場的な」評価において、品質の市場への障害物として告発される）これらの帰属からの解放として提示されるのである。新しいシステムにおいて、「自由」は主として契約的個人主体（この場合、労働市場での、企業との）に対応する。その目的は、基本的であると同時に一般的でもある能力を把握することである（その多様な結合は、雇用格付けと並んで、職業訓練の枠組みや人の適性を再構築することを可能とさせるであろう）。基本的品質へと縮減するという、こうした配慮は、（その全体としての品質を汲み尽くすと想定されている）特性の束へとそれぞれの財を分解する、市場の経済学者の配慮と似ている。しかしながら、製品について我々がすでに見てきたように、こうした分解は市場的交換のレジームを解体し、別様に把握されるべき諸特性へと至る。

### (2) フランス製鋼業連合会 UIMM の基準の先駆的作業

労働格付けの分解は、課業と（それが必要とする）能力との「科学的」分析の長い歴史に統合される。最近のエピソードは、情報理論によって雇用を分析するための以前の努力に照らして考察されなければならない。アメリカモデルによって特徴付けられ、1947-48 年の生産性使節団により輸

入された、こうした分析は、50年代以降、いくつかのフランス企業(Telemecanique, 1948-52; Renault, 1953; Brliet, 1957, Hunout, 1987)において実施された。能力についてのこうした情報学的分析が、1975年の新UIMM(フランス製鋼業連合会)基準を特徴付けており、これはParodi分類に代替し、メチエへの根付きを切断したのである。メチエによる格付けは職業組織と制度に依存していたのだが、近代化論的経営陣は、雇用格付けと、企業組織様式との間で、別の結合を作り出すために、それを脱却しようとしたのである。新しい基準の精緻化は、job evaluationのアメリカ型手法から刺激を受けた雇用分類の経験によって準備された<sup>21)</sup>。こうしてBerliet手法(いわゆるMilox et Boquillon)は、情報の知覚と処理において必要な要請によって雇用を分析し、いくつかの基準の中で以下を区別する。すなわち①「外部受容的情報把握」、②「固有受容的情報把握」、③「意思決定」、④「応答手段の組織化」、⑤「質的調節」、⑥「量的調節」、である。また、もしくは「目標の実現に対立するような不確実性を縮減する」ための「結合」を区別する(Hunout, 1987)。UIMMプロジェクトの「格付け水準」が、行動プランの性格(指示、教示、目標、もしくはプログラム)に応じて、また状況への調節の重要性に応じて、必要とされる能力をどのように区別するか、そのやり方の中にその兆候が見られる(Pezet, 1997, p.68-69)。能力の把握におけるこうした変容の争点は、労働総同盟CGTにより示された敵意により強調される。この労働団体は、メチエの形態及び、(経営陣に対抗できる)集合的組織からの、能力の切断に抵抗する。逆にフランス民主労働連合会CFDTは、とりわけJacques Chereque執行委員の場合、製造された製品もしくは機械へ責任を付与する特定の分類基準に好意的であった。我々はここに、ノーマルな活動レジームの場所(事物や機械、製品の機能性によって、個人的責任の付与を支える)を見いだすのである。しかしながら、労働ポストに対する大きすぎる従属(労働者による能力の獲得にとって、またある雇用状態から別のそれへの移動にとって有害な従属)に対して、懸念が表明された。CFDT代表部の配慮は、パーソンの能力を判断し、「従業員にその基本的技能訓練が付与する潜在性を考慮するために、組織の束縛から個人を脱却させること」(同上、p.52,79)であった。

### (3) 「認知的社会」における品質の規格化

「情報ハイウェー」から「情報社会」へと、情報概念は今日、きわめて広範に使用されており、人間行動およびその設備の関連づけと評価を示している。そこでは「情報」の新しい価値(大きさ)と新しいシテが懐胎しつつあるのを見ることができる。それは精緻化されつつある「環境の大きさ」を識別できたのと同様である。きわめて多様な日常的状況の評価に、また人々の能力の評価の中に、情報概念は浸透している。コンピュータからメディアに至る、情報技術に固有な装備に依拠した広範な議論が、(すべての人にとって利益をもたらすことができる)共通善に言及している。こうして、情報伝達するという、共通の威厳に基づいた、またコミュニケーションの試験に基づいた新しい情報形態が精緻化されるのである。承認の記号によって試験される世論の価値(大きさ)とは異なり、情報の価値(大きさ)は、情報伝達されるものの定式化に基づいている。だからこそこの価値(大きさ)の設備において、規格化が中心的な位置を占めているのである。

欧州委員会によって作成された『教育および技能形成に関する白書』は、「認知社会へ向けて」という副題を持つ。それが確認するように、欧州レベルでの「コンピテンス認定システム」に参画する「コンピテンスの個人カード」の設定によって、「認知社会への大きな一歩が踏み出された」。提案される勧告は、世界への新しい関係を称揚する。すなわち「欧州連合の将来、その影響力は、認

知社会への運動を促進するその能力に大きく由来するいじょう」、この「認知的関係はますます強く我々の社会を構造化するであろう」(p.5)。『白書』の勧告は、個人的コンピテンスの把握に、度量衡的、法律的な二重の装備を追加する。すなわち「各人により達成されるコンピテンス水準を、個人的パフォーマンスの測定手法（その定義と使用は労働者の権利の平等を可能な限り保証する）としなければならないであろう」。

## 10. 情報フォーマットへの批判的開示の手法

規格化された品質の認証が、人間同士の間での、またその環境との人間存在のやりとりの一般的な枠組みとしてますます確認されている。こうした品質認証はよりあからさまに政治的な別の関係に取って代わる。客観的特性に基づいて制定される規制が、(事物の具体化へと、事物の品質に関する論争と判断の場所の手続き化へと、評価原則の問題を縮減する) 統治様式を確立する。品質のこうした査察のおびただしさが、こうした統治様式に、(欧州構築の自由主義的運動に付随する、きわめて一般的な調整様式として) 政治的妥当性を与える。こうした統治の含意は、製品の技術的特徴の選択を超えている。すなわちこうした統治は、人やモノ、その関係がどのように把握されるかに関わり、義務や責任がどのように配分されるか、補助金や共済、もしくは連帯がどのように運営されるかに関わる。もはや、効率的な工業的機能のために事物や行為を両立可能とさせるべく、これらを標準化することが重要なのではない。個人的主体の間での契約的結合を枠組み付け、かくして権利擁護に資する、フォーマルな情報を保証することが争点となっているのである。

### (1) 保証に関与する情報

規格化の政治的次元は、なんらかの規制的制約へとは縮減できないであろう。規格化のこうした政治化は、情報へのその関係における規格化的活動の広汎な側面を考慮しない。規格の規格性=規範性の場所の多様さについて我々が行った調査によって、および規格化と度量衡の別のアプローチの突き合わせによって、我々は、研究の最後で、それほど直接的には可視的ではないが、おそらくいっそう重要な政治的含意を認めるように促される。こうした政治的含意は、規格化装置が支えるコミットメント様式と、装置が確立する保証とから生じる。

配置されている存在物に付与された能力によって、それぞれのコミットメントレジームは、(それを特徴づけている) 固有な不安を抑止する。すなわち、確からしさを確立することで、このレジームは安心 *assurance* の最初の基礎を供給するのである。知識の妥当性についての検討は通常、意味<sup>22)</sup>や理由付け、推論に集中しすぎたままである。こうした検討は、保証 *garantie* についてのプラグマティックな展望へと延長されなければならない。デューイのプラグマティズムは行為の中に知識を統合することに大きく貢献した<sup>23)</sup>。しかしながら我々が指摘しておきたいのは、彼が言う探求 *inquiry* は、(形式化されることで、人工知能や認知主義のプログラムを導くことになる) 問題解決に似ている、ということである。

政治的、また倫理的なプラグマティックなことについての現代的プログラムは、「問題」のフォーマットにそれほど限定されていない—また多様なコミットメント（その適切さはこのフォーマットへとは縮減されない）へといっそう開かれた—経験についてのアプローチを必要とする。デューイは正当にも、「安心 *assurance*」の探求と不確実性との間であって、日常経験にのしかかる緊張を強調する(Dewey, 1967)。しかしながら安心および不確実性のそれぞれのタームはレジームに応じて深

められ、種別化されなければならない。その関係は以下のことに思い至るとき、それほど対立的ではなくなる。すなわち不確実性は第一次的カテゴリなのではなく、不安を統治している掌握枠組みに依存するのである。経済的アクターの合理的活動にとって使用される「予想 *anticipation*」という概念、もしくは、コンヴァンションの定義をしばしば支えている「期待 *attente*」という概念はこの掌握枠組みの中に置き換えられなければならない。すなわち不確実性は、コミットメントレジームを特徴づけているリアリティの帰還への選択的注意に依存するのである。

かくして、上述の社会統計の情報システムは、正当化の「公民的」レジームと「工業的」なそれとの間の妥協に属する集合的な責任付与と連帯による保証の様式に参画するのである。状態やニーズの集合的格付けに応じた人間存在の把握は、人々、とりわけ「リスクある人々」（国家の措置が関わらなければならない）を標定するのに都合がよい。ところが「認知革命」が促進するのは、人間存在の全く異なった把握であり、それは、個人の特性を記録する多様な「カード」（コンピテンス・カードから予防医学のそれに至る）を装備した個人の特徴付けによって人間存在を把握するのである。認知革命は、（自由意思の付与と、責任賦課に適した）ノーマルな活動のレジームと、（機能的、もしくは物理的特徴において人間存在を把握する）レジームとを結合させるのである。こうした把握が、上述のそれとは全く異なった、個人的責任付与と、安心のある保証を支えるのである。

## （２）情報フォーマットの多様性は批判的多数性へと開かれている

規格化と、モノの度量衡の検討を通じて、我々は物理化学的特性への縮減、次いで行動フォーマットと両立可能な機能性への縮減という、幾度となくなされる試みの限界を見ることができた。親密なコミットメント様式は、こうした縮減を遙かに逃れ、近い調節と、使用によるイノベーションを生み出すのである。このイノベーションは「消費者」の姿とはかなりかけ離れているのである（財を使用することで、この財の特性を発見するような消費者を経済理論が我々に垣間見せる時を含めて）。こうした親密性の様式が、執行すべきプランというモデルの中では場所を見出せないような、労働への熟達を統治している（Thévenot, 1995b）。こうした親密なコミットメントレジームでは、あれこれの人間存在や、あれこれの設備の部品に対して、責任を付与することはできない。この場合、責任は、関与しているエージェント全体の中で強い意味で分散されているからである（Thévenot, 1997）<sup>24</sup>。保証 *garantie* は、こうした個人化された責任付与に基づくことはできず、（こうした近接のレジームと、それがもたらす安心 *assurance* を特徴づけている）相互調節のダイナミズムと通じてなされる。今日、顕著となっている規格による統治の逆説は以下による。すなわち、（新しい市場的製品を創出する）使用のイノベーションのためにも、また労働や組織のイノベーションのためにも、こうした親密なレジームに広く依拠する経済のなかで、規格による統治が発展しているからである。フレキシビリティのマネジメントは、親密なレジームがもたらすダイナミズムに広く依拠している。ところが人とモノの品質の認証に資する情報システムは、明らかに、別の情報フォーマットと、別の保証レジームに属しているのである（Thévenot, 1997）。したがって、「品質」という統一的概念の中に多様なレジームを縮減するリスクがある。これは、認知の標準によって支配される均質的情報を促進するべく、批判的な複数性の要請を等閑視してしまうのである。

### 【訳者より】

原注及び参考文献は下巻に掲載する予定である。